# パン屋になる約束

楡井ビデオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パン屋になる約束

【Ｎコード】

Ｎ５６２０Ｓ

【作者名】

楡井ビデオ

【あらすじ】

パン屋になるという約束を果たしたとき、母はもういなかった。

明が遠く山形の地から新潟に来て十年が経つ。
明は二十八歳になった。
十年間、自分に言い聞かせたことが一つある。一人前のパン屋になること。それは母親とのたった一つ約束でもあった。それが彼の生きる支えだった。
十年経ってパンの作り方も店のやり方も覚えた。お金も少し貯まった。そろそろ独立して小さな店舗を借りて、自分のパン屋を開けるところまできた。
故郷の山形には十年間帰っていなかった。母親とは年に二、三回手紙を交換するだけだったが、それは二人の愛情が乏しいことを意味していないのではなく、二人ともうまく互いの愛情を伝えられないだけだった。二人は血がつながっていなかった。
明の育ての母親、鏡子は小学校教師だった。長らく病気で患っていた母親を看護しているうちに結婚に行きそびれた。結婚を諦めた三十九歳のとき、明の父俊樹と見合い結婚した。俊樹は四十歳で子持ちだった。その子供が明で当時5歳になっていた。
鏡子は明の母親の墓前で明を立派に育てますと約束した。そして実の子のようにかわいがった。はにかみ屋で甘えん坊の明は直ぐに鏡子に懐いた。しかし、鏡子は教師だった。躾には厳しかった。中学に上がっていっそう厳しくなった。あまりの厳しさに泣きたくなることも何度もあった。そんなとき、明は本当の母親でないから厳しいんだと勝手に思ったりした。
中学三年のとき、父親が不慮の交通事故で亡くなると、二人の間にはどうすることもできない溝ができてしまった。今まで二人の間に父がいた。しかし、父親がなくなってから、二人の関係を繋ぎとめるものがなくなった。
何かうまくかみ合わないとき、「どうしたの？　何か言いたいこ

とあるの」と鏡子が尋ねると、明は決まって口ごもりながら「何でもない」と答えた。
何でもないはずはなかった。言いたいことはたくさんあった。理知的な母親に責められると、それがうまく言葉にならなかった。何でもない！　それが精一杯の反論だった。
鏡子は鏡子でうまく自分の愛情を伝えられないもどかしさを感じていた。いつしかそれは血が繋がっていないせいだと諦めていた。だからといって愛情が薄れたわけでもないが。
明は高校に進学した。他人でないようで他人のようなちょっと距離のある同居生活が三年続いた。
明が高校三年の春、その日、鏡子はぼんやりと縁側でいた。
どこからもなく桜の花びらが舞ってきた。その花びらを手に掴もうとしたとき、近づく影があった。明だった。ずいぶんと大きくなった。少しあごひげを生やしている。
二人は見つめた。最初に口火を切った。「母さん話があります」
「何の話かしら？　その前に髭ぐらい剃りなさい」
明は無視して、「僕は高校出たら就職します」と宣言した。
「大学に行かないの？」と鏡子は寂しそうな顔をした。
「行きません」
その冷たく言い放す言葉に鏡子は少しむっとした表情を隠さなかった。
明は続けて「もう十八歳だから自分の道は自分で決めます。就職したら家を出るつもりです」
「家を出ます」と二回繰り返した。
鏡子は何も言わなかった。泣いてくれたならきっと明は考えなおしたかもしれない。しかし泣かなかった。
ちょっと怒ったような顔して「何になるの？」
「パン屋に勤める」
パン屋。そう……明の父親から聞いたことがある。明の母親がパン屋を開くことを夢みていたことを。

「そう、確かあなたのお母さんはパン作りがうまかったという話を聞いたことがあったけど」
鏡子は立ち上がった。百五十センチもない鏡子からすると、百七十三センチの明は実に大きく見えた。これが本当の息子なら……無理にでも大学に行かせるのだが、と考えた。でも、血が繋がっていない。血が繋がっていないから、無理強いができなかった。血が繋がっていたなら、大学出て、教師や医師とかそういった手堅い仕事につかせるために言い聞かせたのだが。
「あなたは十八歳になったね。もう十分大人ですね」とまるで他人のような冷たい言い方だったが、彼女は思わず泣き出したい心境だった。
その日の夜、鏡子が幼い頃の明のことを思い出して泣いた。明が五歳の時、実にかわいかった。小さな手をしていた。天使のように微笑んでくれた。あっという間に十三年の歳月が過ぎだ。夢のように過ぎた。父親が死んでから、二人の間に乗り越えられそうで乗り越えられない目に見えない溝ができてしまった。その溝が解消しないばかりかますます深まり、そして別れなければならない運命の日を迎える。自分がどんなに明を愛しているかうまく伝えることができずに。

明が旅立ちの日を迎えた。鏡子は静かに言った。「明、約束してちょうだい。一人前になるまでここに来ないで」
それは鏡子ができる精一杯の餞の言葉だった。
「何があっても、一人前になるまで来ないで！」
「一人前になれなかったら、戻ってくるなということですか」と明はちょっとむっとした顔で応えた。鏡子は微かに頷いた。

それが明の十八の別れ。
新潟に向かう列車の中で、冷たい自分に呆れた。振り返れば、母親は十分に優しかった。精一杯、愛してくれたのに、自分はそれに

うまく応えられなかった。ほんのちょっとしたことなのに。遠い昔のことをあれこれと思い出すうちに涙がこぼれていた。

十一月、秋も終わろうとしていたある日のことである。

近くの公園で散歩をしているとき鏡子は突然胸苦しさを感じ倒れた。幸い近くを通った人が救急車を呼んでくれ病院に運ばれた。

「誰が身寄りはいませんか？」と看護婦が聞いた。

「いません」と鏡子は嘘をついた。

本当は明に伝えて欲しかったけれど、自分の都合で呼び寄せるわけにはいけないと勝手に思っていた。それにひょっとしたら戻って来たくもないのかもと思っていた。それがはっきりと分かるのが嫌だった。

「一人前になれなかったら、戻ってくるなということですか」といった明の顔が目を閉じると浮かんだ。どうして一人前になるまで戻ってくるなと言ってしまったのか？　自分自身でも分からなかった。ただ、立派にならなかったら明の母親に申し訳が立たないと勝手に思っていたのだ。

亡き夫の親戚が見舞いに来た。

「明君は知っているのか」と鏡子に聞いた。

「知っています」

「知っていたら、なぜ見舞いに来ない？」

「私が来なくていいと言ったんです。もうじき退院できますから」

もうじき退院、そう思い続けて一ヶ月が過ぎたのだが、病状は芳しくない。それもそのはず、彼女はガンだった。幸いにして、まだ致命的でなかったが、早期に手術をすることを医師から進められていた。

手術が恐い。このまま死ぬのが恐い。このまま死んだらどうしょう？　明にもう二度と会えなくなったら……。そう思う夜が続いた。

暦は十二月になっていた。雨、そしてみぞれの日々。

「早く手術しないと手を遅れになります」と再三、医師に言われて

鏡子はようやく決心した。
「お願いします」と鏡子は深々とお辞儀をした。
死ぬがさほど恐いと思っていなかったけれど、ただ今、死ぬわけにはいかなかった。明に会って、二人の間にある溝を越え、自分がどんな思いで育ててきたか、自分がどんなに愛してきたかを伝えたかった。
病院から明に電話が来たのは、それから数日経った日のことだ。病院から母親がガンの手術で失敗したら、死ぬかもしれないと言われたとき、明は何が起こったのか分からなかった。ただ大変な状況であることが朧ながら分かった。そして明はいても立ってもいられず列車に飛び乗った。病院についたのは、もう6時間後のことだった。それは手術する数時間前だった。
明はじっと母を見た。母は痛せていた。そして白髪頭になっていた。何か搾り取られたような顔をしていることに気づき、思わず明は泣いてしまった。
「何を泣いているの？」と鏡子は言った。
「何が悲しいの？」
明は首を振った。
「いや、何でもないよ。悲しくはないよ。母さんの顔をみていたら、何だが涙が出てきて……」
そんなせりふは今まで一度も言ったことがなかった。一度も。けれど、その時はなぜかすらすらと言えた。
「パンはうまく作れるようになった？」
「何とか」と戸惑ったような顔をした。
「そう、今度食べさせて頂戴」
手術の時間は刻々と迫り、一時間後となったとき、明は「母さん、母さんとの約束……僕は……」
僕は守れそうもないという言葉を言おうと思ったけれど出なかった。

「何？」
「何でもないよ。もう少ししたら、パン屋を開くよ。そしたら、母さんとの約束が果せる」
「もう少しぐらいなら待てるわ」
それで手術前の二人の会話は終わった。

手術の間、明はずっと無事に手術が終わるように祈っていた。こんなに真剣に祈ったことはなかった。このときほど、自分にとって母がどんなに愛しい人であったか初めて気づいた。手術は何とか成功した。
鏡子は少しずつ元気を取り戻した。

雪が降っていてきた。
「もうじきクリスマスだね。小さい頃、幾つの頃だっけ、もう忘れたけど、それで母さんにサンタクロースはいる？と聞いたら、いると答えてくれたことがあったね」
「覚えているわ。あなたが小学生一年のとき、小さくて、かわいい目をして聞いたもの。何か欲しいものがあるの？　と聞いたら、おもちゃがほしいといっていた」
「朝、起きたら、それ枕元にあった。家にサンタクロースが来たと言って、はしゃいだけど、あれは母さんが買ってきれくれたんだよね」
「あなたはとても喜んでくれた」
明は「ずっとそんなふうに僕を見ていてくれたんだね」と言葉を詰まらせた。
雪は激しく降ってきた。
「今日はホワイトクリスマスね。きれいな雪、明、見てごらんよ」と言って鏡子は顔を背けた。泣きたくなかった。もう少し明を見ていたなら泣いたからだ。泣いたら、明の旅たちの気持ちを鈍らせると思ったからである。

「母さん、一つ聞いていい？俺、パン屋になれなかったらどうしょう？」
「そんなこと、悩んでいた？　パン屋になれなかったから、別の仕事につけばいいよ。大工でも、トラックの運転手でも何でもいいよ」
「でも母さんと約束した。一人前のパン作りの職人になるって。母さんも言った。“一人前のパン屋になるまで戻ってくるな”と」
「あなたがパン屋になるといったら、一人前のパン屋になりなさいと言っただけ。パン屋でも大工でも学校の先生でも何でもよかった。あなたが一人で自分の力で生きていけさえすれば…それが母さんとの約束だよ。そしてあなたは十分、一人で生きているじゃないの。立派に約束を果たしているわよ。……あなたのお父さんと結婚したとき、あなたのお母さんの墓参りをしたの。そして約束したの。あなたを立派な大人に育てるって。あなたは十分、立派な大人になっているわよ」と鏡子は泣いた。涙など明に見せたことがないのに子供のように泣いた。

明がパン屋を開いたのはそれから三年後の秋のことだったが、そのとき鏡子はもうこの世にいなかった。その数カ月月前に鏡子はガンで亡くなった。明が店を開く準備している最中だった。
あっけない死だった。ガンが再発し発見したときは既に遅かった。手の施しようがないほどガンに蝕まれていた。
明が見舞いに行ったとき、前よりもいっそう痩せていた。そのときは誰の目にもだめだというのが分かった。
「母さんとの約束、果たせそうだよ」と言って彼が作ったパンを差し出した。
「ほんの少し時間がかかったけど、ちゃんと約束を果たしてくれて嬉しいよ」と鏡子は微笑んだ。それが最期の言葉だった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5620s/

パン屋になる約束

2011年4月18日06時55分発行